HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	商品流通と貨幣の諸機能 : 遠藤茂雄氏の批判にこたえて
Author(s)	降旗, 節雄
Citation	北海道大學　經濟學研究, 15(2), 63-108
Issue Date	1965-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31140
Type	bulletin (article)
File Information	15(2)_P63-108.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

商品流通と貨幣の諸機能

―― 遠藤茂雄氏の批判にこたえて ――

降　旗　節　雄

はじめに

『資本論』における貨幣の価値尺度，流通手段および貨幣としての貨幣の諸機能の把握について，われわれがおこなった若干の考察[1]にたいして，遠藤茂雄氏が「検討[2]」をくわえられている。遠藤氏の「検討」は，基本的には久留間鮫造氏の所説にもとづいて『資本論』の叙述をそのまま擁護するものであるが，久留間氏および遠藤氏のこの問題にたいする理解は，おそらくいわゆるマルクス主義経済学の「正統派諸氏」の見解を代表するものと思われ，かつわれわれの前記考察は，商品流通と貨幣としての貨幣との関連に焦点をあわせたものであって，価値尺度と流通手段との関連については積極的にふれなかったので，この機会に遠藤氏の「検討」を再「検討」しつつ，『資本論』における価値尺度と流通手段乃至商品流通との関連の問題を考察することにしたい。

遠藤氏の「検討」は二つの部分からなる。第1は，マルクスが商品流通を「商品の変態 (Metamorphose)[3]」として「W—G—W」という「循環の形式[4]」において把握したことにたいするわれわれの批判にむけられたものであり，第2は，『資本論』第1篇，第3章，第3節の「貨幣」，いわゆる「貨幣としての貨幣」の規定についてのわれわれの解釈にたいするものである。

ここでは便宜上，まず一応われわれの『資本論』の「貨幣または商品流通」にたいする考え方をしめしておき，それから遠藤氏の「検討」の再「検討」にうつることにする。

(1) 「商品流通と貨幣」(鈴木鴻一郎編『貨幣論研究』所収),「貨幣論の方法」(『北大経済学研究』第13巻，第3・4号所収）および鈴木鴻一郎編『経済学原理論・上』の第2章「貨幣」。

(2) 遠藤茂雄「商品流通と『貨幣』について――降旗節雄氏のマルクス貨幣論批判によせて――」(『法政大学教養部研究報告』第9号所収。以下「遠藤論文」と略称する。)

(3) K・マルクス『資本論』青木文庫版，① 220頁。(以下『資』と略称する。)

(4) K・マルクス『経済学批判』岩波文庫版，108頁。(以下『批判』と略称する。)

1

周知のように『資本論』第1巻では，第1章「商品」，第2章「交換過程」につづいて第3章で「貨幣または商品流通」を考察し，その第一節「価値尺度」にたいして，第2節で貨幣の「流通手段」としての機能をあきらかにしている。そしてこの「流通手段」の節はまず(a)「商品の変態」の考察をもって開始されている。つまり「商品が価格付与の過程において流通できる形態をえ，金が貨幣の性格をえ」[(1)]るのは，貨幣の「観念的な価値尺度としての機能」[(2)]によってあきらかにされたのであるから，いまや「流通が商品の交換過程の内包していた矛盾を表示し，同時にそれを解決する」[(3)]過程を，「流通手段」としての貨幣の機能によってあきらかにしようというのである。

ところでこの「流通手段」の考察を開始する第一節「商品の変態」の冒頭において，マルクスはまず次のように対象領域を限定している。「さらに立入って考察すると，流通形態は二つの異った循環の形態をしめしている。商品をW貨幣をGと名づけるならば，この二つの形態はつぎのように表現することができる。 W—G—W　　G—W—G　この節ではもっぱら第一の形態，つまり商品流通の直接的形態をとりあつかうことにしよう。」[(4)注)]

注）この文章は『経済学批判』のもので，『資本論』では削除されている。しかし商品流通をW—G—Wなる「形態」でとらえ，これをG—W—Gという資本循環の形式とともに「流通過程」における「二つの異った循環の形態」とする把握自体は，『資本論』においても修正されることなく維持されている。たとえば「商品流通の直接的形態はW—G—Wであ」り，「われわれは，この形態のほかに，独

自の区別のある第二の形態たるG—W—Gという形態を……見出す[5]」としているところからも明らかである。

つまりマルクスによる商品流通の解明は，すでに「諸商品の交換過程の現実的な運動諸形態[6]」としての「W—G—W」の「絡みあい[7]」を前提とし，そこにおける「商品の第一の変態，または販売[8]」の過程としての「W—G」の分析をもって開始せられるのである。「W—G」は，いわゆる「商品の命がけの飛躍」の過程であり，貨幣所有者がこのWを購買するかどうかはWの側からはまったくわからない。そこでマルクスはここに一つの仮定をおく。「仮りにかれの生産物の使用価値は確かだとし，したがってまた貨幣がその商品によって惹きつけられるとしよう。」しかしこの仮定のもとでも，さらにもう一つ「どれだけの貨幣が？という問題が生ずる。」そこでマルクスはまた「商品所有者のおかしかねない純粋に主観的な誤算は度外視」する。「それは市場でただちに客観的に訂正される[9]」からというのである。

マルクスは「W—G」の考察において，このような「仮定」をおき，また「主観的な誤算を度外視」せねばならないのは，「ここでは現象が純粋に考察されるべきであり，かくしてそれの正常的経過が前提されるべきである[10]」からだという。ここに商品流通にたいするマルクスの特有の把握がしめされている。

つまり，ここで商品流通は，その「正常的経過」のうちに「純粋に考察」されているために，商品はその直接的交換可能性を喪失しており，貨幣による購買をとおしてしかその価値を実現しえないという商品流通の特殊な構造が無視され，したがって価値表現における商品所有者の「主観的な誤算」が「市場で」「客観的に訂正される」過程が，すなわち貨幣所有者による購買をとおしてかかる価値表現が「訂正され」る現実的機構の解明が，商品流通の考察から「度外視」されることになっているのである。

このように価値関係を基準とする商品流通の形成について，貨幣を媒介とする具体的運動機構を「度外視」して，その成果だけを「正常的経済」とし

て「仮定」するマルクスの方法は，一面では，価値形態論の展開による商品からの貨幣の形成の解明と，「貨幣または商品流通」の考察との間に，「商品の全面的な持手変換」[11]の現実的過程としての「交換過程」論をわりこませているという『資本論』の篇別構成と関連するとともに，他面では「貨幣または商品流通」の章の第一節としての「価値尺度」論を，たんに商品の「価格形態」の裏面をなす「観念的な価値尺度」の規定のうちに解消せしめつつ展開していることと関連する。

『資本論』では，第一章「商品」において，商品世界が全体としてその価値関係を一つの商品の使用価値によって表現し，この特殊な一商品を一般的等価物とすることによって商品が商品として運動しうる機構の成立を，貨幣形態の形成としてあきらかにしたのにたいして，第二章「交換過程」においては，第一章であきらかにされた商品に内在する矛盾とは異る商品の「交換過程」における矛盾をあらためて設定している。すなわち「どの商品所有者にとっても，他人の商品はいずれも自分の商品の特殊的な等価として意義をもつのであり，したがって，自分の商品は他のすべての商品の一般的な等価として意義をもつ。だがすべての商品所有者が同じことをするのだから，どの商品も一般的な等価ではなく，したがってまた諸商品は，それらが諸価値として等置され諸々の価値の大いさとして比較されあう一般的な相対的価値形態をもたないのである。だからそれらは，総じて，諸商品として対立しあうのではなく，諸生産物または諸使用価値として対立しあうにすぎない」[12]というのである。このいわゆる「交換過程」の「矛盾」を解決するのは，商品所有者の「一定の商品を一般的な等価たらしめる」「社会的行為」[13]にほかならない。かくて一方において，「貨幣結晶」が「交換過程の必然的な産物である」ことが証明されるとともに，他方において，この「貨幣結晶」の生成は同時に諸商品の「交換過程」の成立，したがって商品流通の成立を意味することになる。その結果，価値形態論において展開された貨幣形態の生成過程を，いわば理論的前提として，貨幣が一般的等価物としての直接的交換可能性にもとづいて諸商品を購買し，その価値を実現しつつ商品流通を形成して

ゆく具体的過程は，この「交換過程」の「矛盾」の設定とその解決のうちに埋没されて，理論的解明の対象から脱落することになるのである。

貨幣の価値尺度機能を「観念的」な機能として設定するマルクスの方法は以上の「交換過程」論による商品流通の説明のいわばメダルの裏面をなすにすぎない。つまり「交換過程」の「矛盾」の解決としてみらびきだされる「貨幣結晶」は，「交換のたえざる反復」[14]の歴史的過程のうちに確定されてゆくのであって，このことは同時に「それらの物が交換されあう量的関係」を「それらの生産そのものに依存する」ようにし，したがって「慣習」をとおして「それらの物」が「価値の大きさとして固定」[15]されることになるのである。商品交換の発展と歩調をあわせて，一般的等価形態の貴金属への固着化が進行し，このことはまた同時に「商品価値が人間的労働一般の物質化にまでひろがってゆく」[16]過程と照応することになる。こうして一般的等価形態の金商品への固着化とともに，諸生産物の商品として社会的交換過程，すなわち商品流通と，この貨幣における「抽象的な・したがって同等な・人間的労働の適当な物質化」とが，同時に完成することになる。ここでは価値表現における一般的等価物の論理的形成と，交換過程における一般的交換手段の歴史的生成とが同一視され，貨幣形態の成立が，価格表現機構の形成であると同時に，現実的な商品流通の形成とされる。

「……金は，それがすでに交換過程で貨幣商品として徘徊しているがゆえにのみ，観念的な価値尺度として機能するのである。だから観念的な価値の尺度のうちには，硬貨がまち伏せしている」という点からも推測されるように，「商品流通」論の論理構造は，価値形態の展開によって一般的等価物となった金商品が，この関係を前提としてその積極的な運動過程のうちに商品流通を形成する過程を解明するというのではなく，「金がすでに交換過程で貨幣商品として徘徊している」ことを前提として，貨幣の「観念的な価値尺度」機能をとくのであるから，商品がその価値を観念的に金量で表現すること――これを貨幣の側から規定したのが，貨幣の「観念的に価値尺度」機能にすぎない――と，貨幣の購買過程によって商品の価値が実現されることと

が，同一視され，前者から後者への具体的転換の過程に生ずる「主観的な誤算」とその「客観的」な「訂正」の商品経済的機構の解明は，「正常的経過」の想定のうちに埋没されて，「度外視」されることになるのである。

「W—G—W」をもって「商品の変態」の循環形式とし，「G—W—G」という資本の変態の循環形式と並列させつつ，両者を流通過程における「二つの異った循環の形態」[17]とするマルクスの把握もこの点に由来する。

資本はGとかWとかの具体的姿態をとっては捨てつつ，しかもそれらの姿態変換の過程をとおして，自らを増殖する価値の運動体をなすのであって，特定の時点においては，かならずGもしくはWでありながら，全体としてはGでもWでもないそれらを貫く価値関係そのものとして，運動主体たりうるのである。このような価値の運動体としての資本概念を明らかにしたことが『資本論』の最大の科学的功績のひとつであった。

ところが商品は，このような資本の変態に対応してその変態をなすのものではない。W—Gは，商品が貨幣によって購買されたのであって，商品所有者の手にはいまや商品はなく貨幣があるにすぎない。またG—Wは貨幣で商品を購買したというにすぎない。この過程を商品の変態ということもできなければ，また商品の価値の変態ということもできない。というのは，単純な商品流通では，商品と貨幣という相対的な関連においてしか，商品も貨幣もその価値規定を与えられえないからである。これにたいし資本の場合は，商品と貨幣との相対的関連から独立して，運動体となることによって，価値自体が自立化しているのであって，このような自立化した価値であればこそ，その時々において，商品，貨幣とその姿態を変えつつも，それから独立した資本として自己を維持し，したがってまさに「変態」しえたのである。しかしその価値規定をたがいの相対的関連においてしか維持しえない商品乃至貨幣においては，商品の貨幣への転化はありえても，なおこれをもって価値の「変態」とはなしえない。

しかもマルクスは，ここであえて「商品の変態」として「W—G—W」形式を規定しようとする。これは，かれが商品の価値関係が「市場」で「客観

的に訂正され」つつ，その「正常的経過」が保証される具体的機構を「度外視」して，その結果を「純粋」に考察したことと根本的な関連をもつ。すわなち，このような「正常な経過」を，商品流通における「現象」の「純粋」な展開とする把握は，さらにその「現象」の背後にこの「正常な経過」を現実的に保証する機構として「自己の分散した諸環を分業の体制において表示している社会的生産有機体」[18]を直接に前提しているところからもたらされたものである。このような「社会的生産有機体」は，その「分業の体制」が無政府的な商品経済に媒介されたものであれ，多かれ少なかれ意識的な共同的規制により支配されたものであれ，いずれにしても，人間の自然との物質代謝を基底とする社会的総労働の各生産部門への適合的配分を有機的関連において実現せざるをえないのであって，このような「有機体」の基礎過程が，マルクスのいわゆる「生産一般」の内容をなすのである。

もちろん資本家的生産様式もひとつの「社会的生産有機体」として，商品経済に媒介されつつ，その「有機」的な「量的編成」ならびに「質的編成」を完全に達成しなくてはならないが，この「商品と貨幣」の考察領域は，しかし資本家的生産様式の生産過程と流通過程との一般的関連をあきらかにする「資本の生産過程」論にたいする「序章」であって，ここでは資本家的生産様式の「社会的生産有機」体としての基本的関係を媒介する特殊な質的規定性を，商品，貨幣，資本という流通形態の展開のうちに解明しなければならないのである。資本家的生産様式の「社会的生産有機体」としての完成した運動を具体的に前提するのではなく，むしろこのような完成した運動を形成するための形態と機構とをあきらかにすべき「商品と貨幣」の考察領域において，その形態乃至機構の背後に，「生産一般」の直接的支配を暗黙のうちに想定するという点に，『資本論』における方法的錯誤の根源が胚胎した。そしてこのような超歴史的な経済原則の特殊な発現形式として「商品と貨幣」の形態的乃至機構的展開を把握するという方法を根拠として，『資本論』では，二つの商品の等置関係からただちに労働価値説を論証するという，いうゆる「蒸溜法」的操作が可能となったのであり，また商品流通においては商

品の貨幣への転化が「成功するか否か」が「偶然」[19]であるにもかかわらず，この「偶然」性を捨象して，「正常的経過」を「前提」しつつ，一商品の「総体的変態」をそれに投下された抽象的人間労働としての価値の「変態」として把握することが可能となったのである。

(1) 『批判』 107頁。　(2) 『資』① 219頁。　(3) 『批判』 107頁。
(4) 『批判』 108頁。　(5) 『資』② 284頁。　(6) 『資』① 221頁。
(7) 『資』① 231頁。　(8) 『資』① 223頁。　(9) 『資』① 224頁。
(10) 『資』① 226頁。　(11) 『資』① 193頁。　(12) 『資』① 194頁。
(13) 『資』① 195頁。　(14) 『資』① 198頁。　(15) 『資』① 197頁。
(16) 『資』① 198頁。　(17) 『資』① 108頁。　(18) 『資』① 225頁。
(19) 『資』① 226頁。

2

「本来商品流通は『資本論』で『商品の姿態変換』として規定されているW—G—Wなる形式においてあらわれるものではない。個別的に考察するかぎり，商品流通はじつは購買手段としての貨幣による商品の購買過程としてあるにすぎず」「商品流通も，またいわゆる貨幣流通も，これらのG—Wの社会的な絡みあいの全体における商品乃至貨幣の持手交換の過程をさすにすぎない。(a)の手におけるW—G—W′は，(a)がWを売ってGを手に入れ，さらにこのGでW′を購買したという事実をさすだけであって，(a)の手においてW—G—W′なる商品流通が，価値の変態としておこなわれたというのではない。その点からいえばG—W—G′の資本流通形式に対比すべきW—G—W′なる流通形式はもともと存在しえなかったのである[1]」というわれわれの主張にたいし，遠藤氏は次のように『資本論』の叙述を擁護される。

「マルクスが商品流通の本質を商品の変態W—G—Wとして把えているのはなぜか，ということからみていこう。それは一言にしていえば，マルクスは商品の変態W—G—Wを商品の交換過程の矛盾が自ら生み出した貨幣によって媒介され運動可能となった姿態として把えているからである。つまりマルクスにあっては，商品の変態W—G—Wは，交換過程の矛盾が『商品と貨幣

とへの商品の二重化によって運動可能な形態をもつばあいに，商品が行う形態運動』（久留間鮫造「マルクスの価値尺度論」（Ⅲ）〈思想〉1964年7月号，72頁）として把握されているわけである。[(2)]」

しかし「商品の変態W—G—Wを商品の交換過程の矛盾が自ら生み出した貨幣によって媒介され運動可能となった姿態として把え」れば，何故「商品流通の本質を商品の変態W—G—Wとして把え」ることができるのか，この説明のかぎりではまったく不可解である。そこでわれわれは遠藤氏の指示にしたがって，氏の主張の源泉をなす久留間鮫造氏の「マルクスの価値尺度論（Ⅲ）」の当該箇処の説明をみよう。

久留間氏はいう。「交換過程論ではマルクスは，かつてぼくが『価値形態論と交換過程論』のなかでも論じたように，使用価値と価値との直接的統一としての商品の内在的な矛盾が，実際に商品が交換される過程でどのような形で展開してくるかを考察しているのです。すなわち，交換過程は，商品が使用価値として実現されねばならぬと同時に価値として実現されねばならぬ過程なのですが，この商品の使用価値としての実現と価値としての実現とは，相互に前提しあうと同時に相互に排斥しあう矛盾の関係にあって，そのままでは交換過程は行きづまるほかはなく，商品の全面的な交換は行われえず，したがって，商品生産は社会的生産の一つの形態として成り立ちえないことになる。そこで，交換過程は必然的に，この矛盾を媒介するものとしての貨幣を生み出すことになる。大体こういったことを，マルクスは交換過程論で明らかにしているのですが，そうすると当然次には，その生み出した貨幣の媒介によって，交換過程の矛盾はどのようにして解決されるかが問題になるはずであって，商品変態論でマルクスは，何よりもまず，この問題に答えているわけです。[(3)]」 つまり『資本論』では，交換過程論において，いわゆる商品の交換の矛盾を設定しており，この矛盾から貨幣の生み出される必然性をあきらかにしていた。したがってこの商品流通論では，この交換過程の矛盾が，貨幣の媒介によって現実にいかに解決されるかが考察され，この矛盾の解決の現実的過程が同時に商品流通の過程となるというのである。

この一見形式的な明快さをもった氏の説明は，結局「交換過程論」と「商品変態論」との理論的対応を，交換の「矛盾」の設定とその解決との理論的対応にもとめたものとみてよいであろうが，しかし，この交換の「矛盾」の設定を「価値形態論」との関係において，またこの「矛盾」の「解決」の過程を貨幣による商品の現実的購買過程との関係において，要するに『資本論』の「商品と貨幣」の全体的な論理的関連において把握しなおすとすれば，氏の説明もただちにその表面的な明快さを喪失してくる。

というのは周知のように，『資本論』ではすでに「交換過程論」に先行する「価値形態」論において「諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展，をそれの最も簡単なみすぼらしい姿態から，燦爛たる貨幣形態までたどることによって」「貨幣形態の発生史を証明」し，「それによって同時に貨幣の謎も消滅」[(4)]せしめているからである。その「発生史」の「証明」をとおして，「貨幣の謎」が「消滅」せしめられた以上，いいかえれば商品の中から「直接的な一般的交換可能性の形態または一般的な等価形態」を獲得した特殊な商品金が，「貨幣商品」[(5)]となったことが論証された以上，これを前提とする理論的展開は，この貨幣商品金によるその「直接的な一般的交換可能性」の現実的発動の過程以外にありえないことになる。「直接的交換可能性」をもつ貨幣商品金を中核として，商品世界がその価値関係を統一的に価格として表現しうるならば，もはやあらためて「商品の使用価値としての実現と価値としての実現とは，相互に前提しあうと同時に相互に排斥しあう矛盾の関係にあって，そのままでは交換過程は行きづまるほかはな」いなどという，いわゆる「交換の矛盾」を設定する必要は毫もない。かかる「矛盾」の設定は，すでに「価値形態」論において達成された論証の成果を無視して，無媒介的に商品流通をたんなる商品相互の直接的関係に還元して把握したことに由来する。たしかに「交換過程」論で，マルクスは「商品所有者にとって交換は……もっぱら個別的な過程である」けれども，しかし「他方では」「一般的・社会的な過程であ」り，「同じ過程は，同時にすべての商品所有者にとり，もっぱら個別的であると共にもっぱら一般的・社会的であること

はできない[6]」として，その「矛盾」を設定している。しかし「価値形態」論は，すでにこのような商品の個別的性格と一般的性格とが，特殊的商品を一般的等価物とすることによって，商品関係を個別性によって媒介された一般性であると同時に，一般性のうちに措定された個別性として，その全商品経済的な矛盾の止揚の機構の形成を結論づけていたのであった。したがってこの「価値形態」論を前提とするかぎり，いわゆる「交換の矛盾」は商品経済的矛盾としては設定されえないのである。

久留間氏がマルクスとともに「交換の矛盾」をあらためて措定するのは，「価値形態論では，商品はもっぱら価値の観点から考察されるのであって，使用価値は本来的な使用価値としては，全く考察の圏外におかれ[7]」たと考えるからである。すなわち氏の理解によれば「商品の価値形態は，使用価値でありかつ価値であるところの商品が，そこではもっぱら価値として，それの使用価値としての直接的な存在から区別してあらわれるところの形態であ」り，したがって「価値形態論で，それの価値の表現が問題であるところの商品――すなわち相対的価値形態にある商品――の使用価値が固有の考察の圏外におかれることは，いわば当然のことでなければならぬ[8]。」「それゆえ，使用価値が商品の価値表現において不可欠の役割を演じるとすれば，それは相対的価値形態にある商品の使用価値ではなく，等価形態にある商品の使用価値でなければならぬ[9]」ということになる。このように「価値形態論」を理解するかぎり，「もろもろの商品がいずれも使用価値および価値の統一体として登場し，そういうものとして互に関係しあう過程」としての「交換過程[10]」と異って，「価値形態論」は商品の「分析的・一面的性格[11]」における考察にすぎないことになる。

しかしこのように「商品の使用価値としての実現の過程でなければならぬと同時に，価値としての実現の過程でなければならぬ[12]」「交換過程」にたいし，「価値形態」は「文字どおりに商品の価値の形態」であるとし，したがって前者の綜合的・全面的性格にたいして，後者を「分析的・一面的性格」において把握することは，「価値形態」の基本的な理論的性格を見失ったもの

といわなければならない。

「価値形態」論はけっして「相対的価値形態にある商品の使用価値」を「固有の考察の圏外」において，たんなる「商品の価値の形態」のみをとりあつかうものではない。もともと価値と使用価値との統一としてのみ存在しうる商品にとって，その「価値形態」を，使用価値を「考察の圏外」におきつつ展開することは不可能である。その点で「使用価値が商品の価値表現において不可欠の役割を演じるとすれば，それは相対的価値形態にある商品の使用価値ではなく，等価形態にある商品の使用価値でなければならぬ」[13]とする久留間氏の把握は根本的に誤りである。価値表現においては，相対的価値形態にある商品の使用価値も，すでにその商品所有者にとって直接に使用価値たりえないという質的規定をふくむとともに，その一定量の使用価値という量的規定性において，はじめてその価値表現をなしうるのである。だからマルクスもこの点を次のように強調している。「価値形態は，ただに価値一般ばかりでなく，量的に規定された価値または価値の大いさを，表現しなければならぬ。だから，商品Bにたいする商品Aの・上衣にたいする亜麻布の・価値関係においては，上衣という商品種類が価値体一般として亜麻布にたいし質的に等置されるばかりでなく，ある一定分量の亜麻布たとえば20エルレの亜麻布にたいし，ある一定分量の価値体または等価物，たとえば一枚の上衣が等置されるのである。」[14]

マルクスは久留間氏と異って，価値表現においては，等価物の使用価値量のみを「分析的,一面的」に把握するのではなく，相対的価値形態にある商品の使用価値の一定量との関係において，はじめて等価物の使用価値量も規定されうることを主張するのである。このことはもちろん価値表現において，商品AおよびBの使用価値が同質的規定性において措定されていることを意味するものではなく，等価物Bの使用価値は，まさにA商品の価値として価値表現における積極的な役割をはたすのにたいして，A商品の使用価値量はこの価値関係の量的規定性の前提としてむしろ消極的意義をにないうるものでしかないという事実を否定するものではない。これは等価物Bは，その使

用価値をもってA商品の価値を表現するという関係におかれているかぎり，B商品自身の価値規定を積極的にあたえることはできないという事態と対応した，A商品における価値と使用価値との特有のあり方である。このばあいにも，B商品は，商品として当然その使用価値とともに価値をもつのであるが，その価値規定は積極的に措定されていないというだけのことであって，B商品の価値を「考察の圏外」に放逐して価値表現を展開するわけにはいかない。

このようにマルクスの価値形態論においては，久留間氏の誤解されたように「商品はもっぱら価値の観点から考察され」「使用価値は，本来的な使用価値としては全く考察の圏外(注)」に属するとされているわけではけっしてなく，相対的価値形態にある商品も，等価形態におかれる商品も，それぞれ価値と使用価値との統一としてありながら，価値表現の過程において，この価値と使用価値とがそれぞれ価値関係における特殊的位地に対応して，積極的規定性と消極的規定性という差異をもってあらわれるものとして理解しなければならない。

(注)　この「本来的使用価値」という言葉は不明確であるが，もしそれがいわゆる使用価値としての使用価値，一般的な生産物の使用価値をさすものであれば，これが「考察の圏外」におかれることは，たんにこの価値形態論だけでなく，交換過程論においても，商品流通論においても当然のことである。しかしそれが商品の要因の一つとして使用価値を意味するとすれば，すでにみたように，これを捨象して商品の価値関係を理解することはできないであろう。

つまり価値表現においては，相対的価値形態にある商品も一定の使用価値的制約のもとに，その価値を他の商品の使用価値の一定量によって表現し，等価形態におかれた商品も，それ自身価値をもつものとして，その使用価値自体が相対的価値形態にたつ商品の価値となるのであって，一般的価値形態乃至貨幣形態というその発展した形態においては，この関係があらゆる商品の統一的価値表現として確立され，商品世界全体として個々の商品の価値と使用価値との矛盾が，商品と一般的等価物乃至貨幣との対立をとおして解決

されうる総体的機構のうちに設定されているのである。このようなな理論的展開を前提とするかぎり，次にあたえられねばならないのは，この価値表現の機構を媒介としつつ，商品が価値として，したがって使用価値として実現される過程の考察をおいてほかにないであろう。

マルクスはこれを「交換過程論」において遂行したのであろうが，しかしここであたえられているいわゆる「交換の矛盾」――「諸商品はみずからを諸使用価値として実現しうる前に，みずからを諸価値として実現しなければならぬ」「他方において諸商品は，みずからを諸価値として実現しうる前に諸使用価値たる実を示さねばならぬ。」あるい「は商品所有者」にとって，その商品の交換は「もっぱら個別的な過程であ」り，他方において「交換はかれにとって一般的・社会的な過程である。しかし同じ過程は，同時にすべての商品所有者にとり，もっぱら個別的であるとともに，もっぱら一般的・社会的であることはできない。」あるいは「どの商品所有者にとっても他人の商品はいずれも自分の商品の特殊的な等価として意義をもつのであり，したがって自分の商品は他のすべての商品の一般的等価としての意義をもつ。だがすべての商品所有者が同じことをするのだから，どの商品も一般的な等価ではなく，したがってまた諸商品は，それらが諸価値として等置され諸々の価値の大いさとして比較されあう一般的な相対的価値形態をもたないのである。」[15]――は，商品の交換過程における価値と使用価値との実現の矛盾，個別的過程と一般的・社会的過程との矛盾，特殊的等価と一般的等価との矛盾という三様の異った局面において把握されているが，それらは結局，商品の「全面的な持手交換」[16]を直接商品と商品との関係において設定したことに由来する，商品同志の全面的交換の要求と直接的交換不可能性とのあいだの矛盾として総括されうる。しかしマルクスもいうように，すでに「商品の分析」は，商品所有者が「かれらの諸商品を一般的な等価としての何らかの他の商品に対立的に関連させることによってのみ，それらを諸価値として，したがってまた諸商品として，相互に関連させることができる」ことを「明らかに」[17]していたはずであり，したがって「価値形態論」の展開は，商品交換

において，商品は直接このような「交換の矛盾」のうちにあらわれることはありえないことを論証していたはずであった。

「交換過程論」はこの意味において，「価値形態論」の成果を前提とし，それを媒介としつつ「貨幣または商品流通」の考察領域へとみちびく，これらとならぶ理論的領域とみなすことはできない。しいていえば「交換の歴史的な拡大および深化が，商品の本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を発展させる」ものとして，歴史的な「交換過程の必然的産物」としての「貨幣結晶」[18]の生成をあきらかにする章であり，「商品交換がそのまったく地方的な繋縛を打破し，かくして商品価値が人間労働一般の物質化にまで拡がってゆくのと同じ割合で，貨幣形態が，生れながらに一般的等価という社会的機能に適する商品のうえに，貴金属のうえに，移ってゆく」[19]過程を説明する章とみなすべきであろう。これを要するに，価値形態論における貨幣形態の必然性の理論的解明にたいする，歴史的説明乃至素材的説明によるその補足といってもよい。

しかし商品経済は，もともと共同体と共同体との間に発生した特殊な物質代謝の形式として，特定の生産様式に固有のものではなく，資本主義社会以前の，あらゆる歴史的段階に付随的かつ補足的にあらわれる特殊な社会関係であるために，貨幣形態の理論的解明にたいするその歴史的説明といっても，たとえば資本の蓄積過程の理論的解明にたいする，その歴史的前提としての本源的蓄積の説明などのばあいと異って，その歴史性はいわばきわめて稀薄なものとならざるをえない。それは『資本論』でいうように，「交換のたえざる反復」とともに「時の経過につれて，労働生産物の少なくとも一部分は，意図的に交換の目的で生産されざるをえない」[20]という程度の歴史的をしめすにとどまる。

しかし問題は，このような貨幣形態成立の歴史的説明が，同時に，貨幣の媒介による商品の交換過程の成立と不明確に混同され，その結果，いわゆる「交換過程論」が価値形態論を歴史的叙述をもって補足しつつ，同時に商品の価値表現関係を，商品の交換過程として現実化する理論的過程として把握

される点にある。

久留間氏の『価値形態論と交換過程論』は，この点にかんする『資本論』の叙述乃至展開の曖昧さをそのままうけとめて，「価値形態論」をもっぱら分析的・一般的」な「形態そのものの分析」に限定し，商品の「運動過程」としての「交換過程論」と対置せしめつつ，これを「特殊の一商品である金が如何にして一般的等価物になるか」という問題と，「そういうものが何によって必要とされ，形成されるか」[21]という問題との対応として説明しようとしたものであった。

しかし「特殊の一商品である金が如何にして一般的等価物になるか」という点を「そういうものが何によって必要とされ,形成されるか」という問題ときりはなしてとりあつかうことが本来可能なことであろうか。久留間氏は「交換過程」の終りに近いところでマルクスがのべている「困難は,貨幣が商品であることを把握する点にあるのはなく，如何にして,何故に,何によって商品が貨幣であるかを把握する点にある」という言葉によりながら「価値形態論では貨幣の『如何にして』が論じられ，物神性論ではその『何故』が論じられるのに対して，交換過程論ではその『何によって』が論じられる」[21]という独自の解釈をあたえている。しかしマルクスは，この「如何にして，何故に，何によって商品が貨幣であるか」という問題を，それぞれ三つの異った問題領域に区分してあつかおうとしたのでもなければ，まして，それを価値形態論，物神性論，交換過程論に対応させて考えていたのでもないことは，それについてのべられているマルクスの次の文章によっても容易に推測されうる。

「われわれの見たごとく，すでに最も簡単な価値表現たるX商品A＝Y商品Bにおいても，他のある物の価値の大いさがそれで表示されるところの物は，それの等価形態を，この連関から独立に，社会的な自然属性として有するかに見える。われわれは,この虚偽の仮象の確立を追求した。この仮象は，一般的な等価形態が，ある特殊的な商品種類の自然的形態と癒着したとき，または貨幣形態に結晶したとき，完成するのである。一商品は，それにおい

て他の諸商品が全面的にそれらの諸価値を表示するがゆえに初めて貨幣となるのだとは見えないで，むしろその逆に，その商品が貨幣であるがゆえに，それにおいて他の諸商品が一般的にそれらの諸価値を表示するかに見える。媒介する運動はそれ自身の結果のうちに消失して，あとには何らの痕跡も残さない。諸商品は，それらの力添えをまたないでも，それら自身の価値姿態がそれらの外部に・かつそれらの傍らに・実存する一商品体として完成されているのを見出す。(22)」

「如何にして，何故に，何によって，商品が貨幣であるか」という問題は，マルクスによれば，「虚偽の仮象の確立」過程の「追求」によってすでにとかれているというのである。そして，この「最も簡単な価値表現」にはじまって「貨幣形態に結晶」するにいたる，マルクスのいわゆる「虚偽の仮象の確立」過程の「追求」こそ，価値形態論の展開以外の何ものでもないであろう。こうして価値形態の展開をとおして貨幣形態が成立すれば，「諸商品は，それらの力添えをまたないでも，それら自身の価値姿態がそれらの外部に・かつそれらの傍らに・実存する一商品体ととして完成されているのを見出す」ことになる。つまり「如何にして，何故に，何によって商品が貨幣であるか」という問題が，「ブルジョア経済学者によってはかって試みられなかった」「貨幣形態の発生史を証明すること――つまり，諸商品の価値関係にふくまれている価値表現の発展を，それの最も簡単な最もみすぼらしい姿態から，燦爛たる貨幣形態までたどること」によって，完全に解明されるという点にこそ，マルクスの方法の独自性が存在するのであって，この「如何にして」と「何故に」と「何によって」とが不可分の問題として設定され，かつ統一的に解決されなくてはならないことをこそマルクスは強調しているのである。したがって，この「如何にして」はそれ自身すでに「何故に」「何によって」をふくんでいるのであって，ここでマルクスが三つの疑問形として提示したのは，久留間氏のいわゆる「いささかしゃれたいい方でいっているのにすぎない。」いわばレトリックの問題である。「これが右のように誤解されることになると，しゃれもめったにいわれないことになる。(23)」　もっとも

「しゃれ」を「しゃれ」として，レトリックをレトリックとしてうけとめられず，そこに当人が予想もしなかったこじつけた解釈を案出するのは，祖師のことばをたんに訓話註釈することをもって学問と誤認する教条主義的エピゴーネンがかえっておちいりがちな陥穽であって，珍らしいことではない。

それはともあれ，ここにみてきたように価値形態論における矛盾と区別して，「交換過程の矛盾」なるものを論理的に設定することは不可能であるとすれば，久留間氏が主張されるように，そして遠藤氏がこの久留間氏の主張によりつつくりかえし主張されるように，交換過程論につづいて，「その生み出した貨幣の媒介によって，交換過程の矛盾はどのようにして解決されるかが問題になるはずであって」「商品変態論」は「この問題に答える」ものであるという，『資本論』のこの諸章，節についての一連の把握は，根底から否定されることになる。すなわち価値形態論の成果を前提とするかぎり，唯一の直接的交換可能性を保持する貨幣が，自己の欲する商品を購買するG—Wの過程をもって商品流通の考察を開始することが，対象の論理構造と照応する理論的展開となるはずである。この過程を媒介とすることなく，「商品流通の本質を商品の変態W—G—Wとして把え」ることはできない。

このわれわれの主張は，けっして遠藤氏が早合点されたように，「販売W—Gの過程も購買G—Wの過程も，人々の日常の意識にはたんに普通の商品と金との所有者または位置の変換としてあらわれる」ということから，この「日常の意識をそのまま『理論』と」した「俗流経済学者と同じ理論的立場」にわれわれが立つことを意味するものではない。ぎゃくである。マルクスのいうとおり「商品と金との交換というこの質料的契機にのみ拘泥するならば，ひとはまさにその見なければならぬものを，すなわち形態について起ることを，看過する[24]」ことになるが，このような「形態変換の理解」の「不充分」性を根本的に批判するためには，たんに商品と貨幣との形態規定における差異をあきらかにするにとどまらず，この形態規定を前提とした，具体的運動機構における商品と貨幣との機能の差異までも明らかにする必要があるというのである。むしろ遠藤氏のように，商品と貨幣との商品流通における

機能の差異を無視して，ただちに「商品流通の本質を商品の変態W—G—Wとして把え」るとすれば，貨幣の機能はたんなる流通手段の規定に埋没され，「質料的内容からみれば，この運動はW—Wであり，商品と商品との交換であり，それの結果のうちへ過程そのものが消失するところの，社会的労働の質料変換[25]」へと解消されることになる。商品流通がG—Wの過程をもってしか開始されえないことを無視して，「商品流通の本質を商品の変態W—G—Wとして把え」た結果，はからずも遠藤氏の排撃してやまぬ「俗流経済学者と同じ理論的立場に立たれ」た格好の見本は，当の遠藤氏の依拠される久留間氏の次のような主張であろう。

「なるほど，貨幣の側からのG—W(購買)なしには，商品のW—G(販売)は行われえないということは，たしかに事実に相違ないが，しかし同時にまた，商品の側からのW—Gなしには貨幣のG—Wの運動は行われえないということも事実です。両者は相互に条件づけあう関係にあるので，一方だけが他方の条件をなすわけではないのです。だがいずれにしても，これはもともと運動が行われるためのいわば外的な条件の問題にすぎない。われわれは，運動を問題にするばあい，そういう外的条件を問題にする前に，運動そのものが何によって必然とされるかを問題にする必然がある。一般にあるものが運動するのはそれが矛盾をもっていて，そのままの状態にとどまりえないからです[26]。」

しかし「貨幣の側からのG—Wなしには，商品のW—Gの運動は行われえない」というのは，直接交換可能性の唯一の保持者たるGによる購買なしには，Wはそれ自体として「運動」を展開しえないという商品経済に特有の事実をさすのであって，「商品の側からのW—Gなしには貨幣のG—Wは行われえない」とすることは，この貨幣と商品との機能上の差異を見失った見地からのみ「事実」とされるにすぎないのである。したがって「G—Wなしには」「W—Gは行われえない」という「事実」と，「W—Gなしには」「G—W」は「行われえない」という「事実」とを，「相互に条件づけあう関係」として等置する久留間氏の理解こそ，「商品と金との交換という質料的契機に

のみ拘泥」し「形態について起ることを看過する」，遠藤氏のいわゆる「俗流経済学者」の「立場」と「同じ」もの，あるいは少なくともかかる「立場」への道をひらくものにはほかならない。

もともと「G—W」，あるいはその裏面としての「W—G」は，商品流通の「運動」そのものであって，「外的な条件の問題」ではけっしてない。全商品がその価値を貨幣によって表現し，したがって貨幣は任意に商品を購買できるという価値形態論の一般的成果を前提とするかぎり，商品流通の「運動」は，まず「G—W」の過程をもってしか開始されえないという点こそがこの「運動」の基本的性格をなすのである。この関係をたんなる「外的な条件の問題」として排除すれば，「運動そのものが何によって必然とされるかを問題にする」こともできないだろう。「運動」がおこなわれる展開機構の形成過程を「外的条件」として無視すれば，のこるのはすでに成立した機構の内部での「運動」の結果にすぎない。すなわちこれが遠藤氏のいわゆる「商品流通の本質を商品の変態W—G—Wとして把え」る立場である。このようにして「商品流通の本質」を「W—G—W」としてとらえるかぎり，この商品流通の機構の特殊性，つまり形態規定は見失われ，結局マルクスのいわゆる「それの結果のうちへ過程そのものが消失するところの，社会的労働の質料交換」の中に商品流通の把握を埋没させることにならざるをえない。

『資本論』におけるこのような商品流通把握の側面は，冒頭における価値実体の論証，「商品で表示される労働の二重」性の説明，「交換過程論」における交換の矛盾の設定などと共通する流通形態の把握の仕方をしめすものであり，これらは結局「流通の背後に設定された『生産一般』の視点」によってみちびきだされたものではないか，というのがわれわれの見解であった。これにたいして遠藤氏は二つの点をあげて，われわれの「『資本論』にたいする無理解と誤解」を非難される。「第一に，マルクスは『資本論』第一部第一篇においては，商品生産という社会的生産の特殊的形態を，商品生産がそれによって一つの特殊社会的生産として成り立つところの商品交換およびその商品交換の諸契機を問題として設定しているのであり，降旗氏のい

われるような『生産一般』（およそ相異なる生産の社会的形態にかかわりない「生産一般」）を，したがって『あらゆる生産形態にひとしく固有である労働過程』を，どこにも問題として設定したり想定したりしてはいない[27]」というのではある。

もちろんわれわれも，マルクスが『資本論』第1巻第1編において，「生産一般」という範疇を「問題として設定したり想定したりして」いると考えてもいないし，のべてもいないはずである。『経済学批判綱要』では，マルクスは「生産一般」を「交換価値の章に先行」する「第一章[28]」としてとりあつかう，あるいは「交換価値一般についての第二篇の第一篇」にたいして「生産一般についての第一篇[29]」をおくプランをもっていた。しかしこのプランはのちに修正されて，結局現行『資本論』のように，「生産一般」ではなく，「商品と貨幣」をもってはじまる構成へと改変されていったことは周知のとおりである。その点からすれば，たしかに「生産一般」は独立した範疇としては『資本論』の第1篇の「どこにも問題として設定したり想定」されたりしてはいないというべきである。しかしこのことは，この第1篇の理論的展開の背後に，この「生産一般」を前提とした価値把握の「視点」が「設定」ないし「想定」されているということを否定するものではない。いわゆる「蒸溜法」による価値実体の論証にさいして，マルクスが商品の使用価値を捨象することによって「労働生産物という属性」を抽出し，しかもこれを「すべてのこらず，同等な人間的労働すなわち抽象的人間的労働に還元[30]」することができたのは，いうまでもなく「商品世界の諸価値で表示される社会の総労働は，無数の個人的諸労働力から成立っているとはいえ，このばあいには一個同一の人間的労働力として意義をもつ[31]」という把握を前提としてはじめて可能であった。「社会の総労働力」が「一個同一の人間的労働力として意義をもつ」というのは，いうまでもなくその「社会」の生産過程の主体をなす「総労働力」が，「社会」の総需要に適合するような質量編成をもって，総生産にわりあてられており，各生産物に投下された労働が「社会」の総労働の有機的可除部分として規定されており，この労働の量的関係が「商品世界の諸

価値」としてあらわれていることを意味する。社会の総労働力の生産部面へのかかる合理的配分こそ，あらゆる社会に共通なその再生産のための必然的な経済原則的関係なのであり，マルクスのいわゆる「生産一般」ないし「労働一般」の規定は，この関係をおいてほかにない。したがってこのような理論的構造における「労働力」配分と社会的生産の把握をもって，われわれは商品世界の諸価値」の背後に「生産一般」の規定を「想定」する「視点」とみなすのである。『資本論』における価値実体の論証にしろ，交換過程の矛盾の設定にしろ，商品の変態としての商品流通の把握にしろ，すべてこのような「生産一般」の規定を商品流通の背後におき，商品流通はすでにこの社会的再生産過程としての人間の自然との物質代謝の一局面の特殊媒介形式として位置づけられていることを暗黙のうちに前提とすることによって，なりたっているのである。

もちろんこのような商品流通の把握は，資本家的生産様式を前提としつつも，資本の生産過程はいうまでもなく，資本形式からも，貨幣形態からも抽象して，まず「富の原基形態」としての「商品」形態をもってその研究を開始した，『資本論』の本来の方法と背馳するものといわねばならない。

しかし遠藤氏は，われわれのこのような経済学の概念把握における抽象ないし捨象の理解にたいして批判をむけられる。「第二に降旗氏が『商品流通は，当然その背後における生産過程も消費過程も捨象された流通それ自体としてあらわれる以外にない』といわれる場合の『捨象』の意味が氏独特であることに注意しなければならない。氏にあっては，『生産過程も消費過程も』『捨象』されるということは，その客観的な存在も否定されることなのである。つまり氏にあっては，『捨象』されることによってその『存在』はなくなる，したがってその『存在』は『前提』されない，そこには『商品流通』だけがある，というのである。だがこれこそ『認識過程と現実過程との混同』といわるべきであろう。『商品流通』すなわち労働生産物が商品として流通する過程をそれ自体として論ずる場合には，労働による商品の生産過程そのものはそこでは考察されない。だがその『過程』は『否定』されるのでな

くて『前提』されている。氏のように，『流通』だけがまずあって，それが『生産』に移行したり『生産』を把握したりするのでは決してないのである。『生産』をぬきにして考察される『流通』は，考察のために抽象された現実の一面にすぎない。だから，そのような『流通』の認識は，必然的に現実の前提された他の面すなわち『生産』の考察を要請することになるのである。」(32)

もちろんわれわれも「『生産過程も消費過程も』『捨象される』ということは，その客観的な存在も否定されること」だとは考えていない。商品流通の考察のさいにも，当然商品はなんらかの生産過程をとおして生産されて市場にあらわれるのであり，購買されて市場から姿を消せば個人的消費にしろ生産的消費にしろ消費過程へはいっていかざるをえない。このような生産過程や消費過程の「客観的な存在」を「否定」するとすれば，そもそも現実的にも理論的にも，商品流通自身が存在しえないだろう。ただ商品流通の考察段階においては，この「生産過程も消費過程も」いかなる生産過程であり，消費過程であるか，その理論的規定をあたええないというだけである。このようにまだ理論的規定をあたええない生産過程や消費過程は，商品流通の考察にとって「捨象」されており，理論的にその「存在」は「前提」されていないとしてなぜ誤りなのであろうか。

遠藤氏自身「『生産』をぬきにして考察される『流通』は，考察のために抽象された現実の一面にすぎない。だから，そのような『流通』の認識は，必然的に現実の前提された他の面，すなわち『生産』の考察を要請することになる」とされているのであるが，「『生産』をぬきにして考察される『流通』」とは，生産過程を理論的に規定されたものとして「前提」することなく，「流通」を抽象的に把握することを意味するのではないだろうか。したがって，そのように抽象的に把握された資本家的生産様式の一面としての「流通」であればこそ，必然的に「『生産』に移行したり，『生産』を把握したりする」ことになるのではないか。流通が「生産」を「把握」するというのは，「『流通』の認識」が「必然的に」「『生産』の考察を要請することになる」という論理過程の対象自身にそくした表現にすぎないということが何故

理解されないのであろうか。遠藤氏のいわゆる「労働生産物が商品として流通する過程をそれ自体として論ずる場合には，労働による商品の生産過程そのものはそこでは考察されない」という方法を，われわれは「生産過程」を捨象して商品流通を流通それ自体として」とらえる方法にほかならないというのである。

このような資本家的生産様式の理論的考察にさいしてとられる特殊な抽象的方法は，「抽象的なものから具体的なものへ上向する方法[33]」として展開されることになるが，いうまでもなく「現実の主体は，いままでどおりあたまのそとがわに，その自立性をたもちつづける」のであって，この方法は「あたまがただ思弁的にだけ，ただ理論的にだけふるまうかぎり，そうなる[34]」ところの，「経済学的諸カテゴリーの歩み[35]」をしめすだけなのである。

資本主義的生産様式の原理的考察においては，「考察のために抽象された現実の一面」として，まず「『生産』をぬきにして考察される『流通』」をそれ自身としてとりあつかわねばならないが，同時に商品流通自体の考察においても，「考察のために抽象された現実の一面」として，まず購買手段としての貨幣の機能によって形成され，流通手段としての貨幣を媒介として運動しつつある商品流通が，商品流通のもっとも単純な規定として把握されねばならない。このような商品流通は，商品流通のもっとも基礎的かつ抽象的な把握であって，これは当然その外部の貨幣の諸機能と関係をもちつつ，より具体的な運動を展開する複雑な商品流通をみちびく前提となるのである。

ところがこのような商品流通の把握にたいしても，遠藤氏は次のように批判される。「マルクスは，認識の対象として氏のいわれる『論理的に形成されつつある商品流通』というようなものをえらんだりはしていない。彼は現実の『商品流通』を研究の対象としているのである。周知のように，『資本論』の研究の対象は，われわれの眼前にある資本家的生産の組織であり，『資本論』第1部第1編で研究されている『商品流通』は，まさに資本家的生産が社会的生産（分業）の一特殊的形態として成り立つところの基礎，すなわち商品生産の一面としてとりあげられているのである。そしてまたマル

クスは，貨幣の諸機能をこのような『商品流通』の種々の契機から展開しているのである。[36]」

しかし，マルクスは「現実の『商品流通』を研究の対象としている」といっても，同じ第3章「貨幣または商品流通」の中においても，第2節「流通手段」と第3節「貨幣」とでは，その「商品流通」の貨幣との関連における把握はあきらかに異なっている。つまり「流通手段」の考察においては，「流通状態にある商品の分量によって」「諸商品の価格総額」が決定され，この「諸商品の価格総額」によって「流通手段の分量」が一方的に「規定される[37]」ものとして，商品流通と貨幣との関係が把握されている。

もちろんこれは「流通しつつある商品世界の価格総額」および「商品世界の対立的な流通諸過程の流れの緩急[38]」によって，流通に必要な貨幣量が増減することを意味するが，この流通手段の増減の機構自身は，ここではたんに「諸商品の流通部面には一つの開口がついていて，そこから金（または銀，要するに貨幣材料）が，与えられた価格の商品として流通部面に入りこむのである[39]」とされるだけである。貨幣の流通手段の機能の説明としては，これは当然なことである。しかしこの「流通部面」の「一つの開口」をとおして貨幣が流入ないし流出する（マルクスは流入のばあいしかふれていないが）ということは，商品流通と貨幣との関連について，なお考慮すべき問題をなげかけている。

というのは，このばあい流通手段としての貨幣が商品流通からひきあげられて，蓄蔵貨幣として保持されるとすれば，商品流通をW—Gで切断して，このGをもって連続的にG—Wの過程を逐行しないことを意味するのであって，そのこと自体「流通しつつある商品世界の価格総額」ないし「商品世界の対立的な流通諸過程の流れの緩急」に一定の影響をおよぼさざるをえないからである。これは流通手段としての貨幣が，「商品世界の価格総額」や商品流通の速度を規定するというのではない。流通手段としては，その量的規定性を商品流通によって一方的に規定されざるをえないのは当然である。ここで流通手段としての機能から脱してひきあげられ，あるいは流通手段とし

てでなく流通の外部からあらたに購買手段としてはいってくる貨幣は，マルクスのいわゆる「交換価値の唯一十全な定在」[40]として，それ自身の運動によって「流通しつつある商品世界の価格総額」およびその「流れの緩急」を規制し，かくして規制された「流通しつつある商品世界の価格総額」およびその「流れの緩急」が，さらに流通手段としての貨幣の量を決定することになるのである。

したがって第2節「流通手段」において商品流通による流通手段の量的決定があつかわれるのにたいして，第3節「貨幣」においては，かかる商品流通自体が「貨幣」の運動によって規制されざるをえない点があつかわれるのであって，この点にこの二つの理論領域における「商品流通」のとりあつかいの差異が存するのである。もっとも『資本論』においても，このような商品流通と貨幣との関連の二つの節におけるとりあつかい方の差異は，かならずしも明確ではない。それはいうまでもなく，この商品流通の前提となる貨幣の価値尺度機能の把握がたんなる観念的な商品による価格表現関係の裏面へと解消され，貨幣の価値物としての積極的な運動による商品流通形成の過程の考察が脱落せしめられていることによる。

遠藤氏は，われわれにあっては「『貨幣の機能』は，『商品流通』から展開されるのではなく，逆に『貨幣の機能』が，『商品流通』を『論理的に形成』せしめるものになっている」とされ，「では，氏の『貨幣の機能』はいったいなにから導出されるのであろうか」と反問されつつ,「それは多分，概念としてアプリオリに与えられ，かく与えられた概念が自身の矛盾によって自己展開をなすもの，ということになるのであろう」と解釈されている。そして「貨幣の機能概念の『必然的な自己産出過程』⟶商品流通の論理的形成過程。だがこれこそヘーゲルかぶれの神秘主義といわれるべきものである。」[41]として，われわれの展開を，ヘーゲルの論理との類似性において評価されている。しかしこれはいささか評価の過剰，あるいは買いかぶりというべきであろう。われわれはそれほど「神秘」的なことを主張しているわけではない。

われわれも遠藤氏の理解されるマルクスと同様，「貨幣の諸機能」を「『商

品流通』の種々の契機から展開」すべきであると考えるのであるが，そうだとすれば，貨幣としての「貨幣の諸機能」が展開される以前の「商品流通」というのは,貨幣としての「貨幣の諸機能」によって媒介される「商品流通」と比較して，なお抽象的な「商品流通」と考えるべきではないかというのである。むしろそのように抽象的に把握された「商品流通」だからこそ，そこではまだその内部の流通手段の増減についての具体的な機構をもときえず，したがってその「商品流通」は必然的に貨幣としての「貨幣の諸機能」を展開せざるをえないことになる。貨幣としての「貨幣の諸機能」はかくして，一面では「商品流通」から展開されるとともに，他面この展開された貨幣としての「貨幣の諸機能」に媒介されて，「商品流通」自体，流通手段の増減の機構を貨幣としての貨幣の具体的運動のうちに形成しつつ，現実的な「商品流通」へと自己を形成することになるのである。

このようにして「商品流通の論理的形成過程」をとくことが，何故「ヘーゲルかぶれの神秘主義」といわれなければならないのであろうか。

(1) 拙稿「貨幣論の方法」(『北大経済学研究』第13巻，第3・4号所収) 195～6頁。
(2) 遠藤論文78～9頁
(3) 久留間鮫造「マルクスの価値尺度論（Ⅲ)」(『思想』1964年7月号所収) 72頁。
(4) 『資』① 133頁。　(5) 『資』① 169頁。　(6) 『資』① 194頁。
(7) 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』 14頁。（以下『交換過程論』と略称する。）
(8) 『交換過程論』 13頁。　(9) 『交換過程論』 13頁。
(10) 『交換過程論』 11頁。　(11) 『交換過程論』 12頁。
(12) 『交換過程論』 17頁。　(13) 『交換過程論』 13頁 。
(14) 『資』① 142頁。　(15) 『資』① 193～4頁。　(16) 『資』① 193頁。
(17) 『資』① 194頁。　(18) 『資』① 195頁。　(19) 『資』① 198頁。
(20) 『資』196～7頁。　(21) 『交換過程論』 40頁。
(22) 『資』① 204頁。　(23) 『交換過程論』 25頁。
(24) 『資』① 221頁。　(25) 『資』① 223頁。
(26) 久留間「マルクスの価値尺度論（Ⅲ)」 87頁。　(27) 遠藤論文 80頁。

(28) K・マルクス『経済学批判綱要』206頁。(以下『綱要』と略称する)
(29) 『綱要』 226頁。　(30) 『資』① 118頁。　(31) 『資』① 120頁。
(32) 遠藤論文 80～81頁。　(33) 『批判』 313頁。　(34) 『批判』 314頁。
(35) 『批判』 321頁。　(36) 遠藤論文 81頁。　(37) 『資』① 241頁。
(38) 『資』① 245頁。　(39) 『資』① 240頁。　(40) 『資』① 258頁。
(41) 遠藤論文 82頁

3

だが遠藤氏はそればかりでなく，このような「商品流通の論理的形成過程」の理解が，「貨幣数量説（貨幣量の増減によって物価の比例的変動をとく俗見）の基礎理論とあまりにも類似していることに気づかれ」，われわれの「商品流通論の立場から，貨幣数量説をいかにみられるのか」[(1)]と追求される。

「ヘーゲルかぶれの神秘主義」のうえに「貨幣数量説」との「類似」性を「論断」されるにいたっては，たしかにわれわれの「真意に反すること」であって，以下多少の釈明をこころみざるをえない。

しかしその前に「貨幣数量説の基礎理論」にたいする遠藤氏の理解自体について若干考察しておく必要があろう。というのは周知のように「貨幣数量説」なるものは，けっしてその内容を一義的に規定しうる独立した学説というのではなく，その主張者によってきわめて異なった意味をあたえられている多義的な見解の総括にすぎないからである。ここで遠藤氏は，「貨幣数量説」の「理論的基礎」なるものをつぎのようにまとめられている。「(a)流通においてG—Wを重視し，したがった流通において貨幣の運動を運動の主体として把握すること。(b)商品はそれ自身価値〈実体的な〉をもたずに流通にあらわれ，流通において貨幣との関連においてそれらの価値関係が決定されると把握すること。(c)貨幣の機能を『流通手段（＝購買手段）』としてのみ，あるいは価値尺度をはじめその他の機能を認めるが，それらはすべて『流通手段（＝購買手段）』の見地から眺められること。」[(2)]

しかし「貨幣数量説」は，もともと貨幣自身の「価値」を，その数量的変動と逆比例して把握しようという点を基軸として展開されたものではなかっ

たか。たとえば貨幣数量説の典型の一つであり，かつその後の数量説的見解の源泉を形成したりカードについてみよう。かれによれば，「ある一国において金鉱が発見されたとすると，その国の通貨は，流通内にもちだされる貴金属の量が増加する結果として，下落し，したがって諸外国のそれと同じ価値をもちえないことになるであろう。」これに応じて諸商品価値も変化するが，これにたいして「下落した価値」をもつ貴金属は外国に輸出され，「輸出された金の対価として貨物が輸入され」，このような過程をとおしてして商品と貨幣との国際的な「均衡は回復される」[(3)]というのである。おなじみの貨幣数量説による貨幣と商品との国際的均衡運動を媒介としたその価格決定のメカニズムの説明である。またキルマイヤーはその『数量説』において，「貨幣数量説」のタイプを，貨幣数量の変動が機械的に物価の変動をみちびくとするもの，この間に正比例関係を想定するもの，流通速度を考慮にいれるもの，交換方程式によってこの因果関係をあきらかにしようとするもの，というやや雑ぱくな基準で四種類にわけている[(4)]。しかしいずれにしても貨幣数量説においては，金（ないし銀）がすべて貨幣となり，しかも貨幣はすべて流通手段として機能するという前提にたって，貨幣の「価値」と商品の価値とが，貨幣の数量との関係で機械的に決定されることになっているとみてよいであろう。「貨幣数量説」の「理論的基礎」がこのように要約できるとするならば，遠藤氏による「貨幣数量説」の理解はいささか不正確のそしりをまぬがれない。

まず「流通においてG—Wを重視し，したがって流通において貨幣の運動を運動の主体として把握する」というばあい，「貨幣数量説」は一体何との対比において，「G—Wを重視し」，また「運動の主体」としての「貨幣の運動」にたいし，何を運動の客体として考えようとしたのであるか。われわれが「G—W」をもって商品流通の形成がとかれねばならぬとするばいには，商品世界がその価値関係を，単一の特殊的商品——貨幣によって，全面的に表現しているという関係を前提としつつ，「G—W」による価値の実現の過程をとりあげているのである。「貨幣数量説」にはもともとこのような商品

による価値表現の関係を，商品流通に先だって，展開するという視点が欠落していたのではないか。それゆえ『数量説』は，「商品はそれ自身価値〈実体的な〉をもたずに流通にあらわれ，流通において貨幣との関連においてそれらの価値関係が決定されると把握する」のであるが，この「貨幣との関連」における「価値関係」の「決定」には，商品の側からその価値を表現する関係と，貨幣によってこの表現関係を前提としつつ価値を実現する過程との，二つの異なった「価値決定」の機構，したがって論理段階が存在するというのがわれわれの主張であった。「商品はそれ自身」「実体的な」「価値」「をもたずに流通にあらわれ」るというのではなく，「実体的な」「価値」をもって流通にあらわれるとしても，その「実体的な」「価値」は，かかる単純流通においては理論的に確定しえないというのである。商品はたんに一定量の貨幣をもって自己の価値を表現するだけであって，「流通において貨幣との関連において，それらの価値関係」が現実的な価値として社会的承認をうることになる。しかここでもまだ「実体的な」「価値関係が決定される」わけではない。

「数量説」では「商品はそれ自身価値〈実体的な〉をもたずに流通にあらわれ」るとされているとして，われわれが商品の価値の実体的規定を商品論ないし商品流通論から排除しようとするのと，「貨幣数量説」の主張との間に，なんらかのアナロジーを連想せしめようとするのが，遠藤氏の意図するところであるとすれば，そもそも「貨幣数量説」では，価値の形態規定とその実体との区別が問題となりえないこと，したがって「商品はそれ自身価値〈実体的な〉をもたずに流通にあらわれ」るどころか，価値形態をもって「流通にあらわれ」ることさえ認められていないことを注意しておこう。

両者におけるこのような理論構造の根本的相異さえ忘れて，現象的類似性をひろいあげることによって——それも相当無理なレトリックの採用にたすけられてであるが——，悪名高い「貨幣数量説」というレッテルを相手にはりつけようとするかかる手口は，厳密な論理的批判の能力を欠きつつも，性急な批判のための批判の要求にかられるばあいによくみられる常套的手法で

あるが，それにしても「貨幣の機能を『流通手段（＝購買手段)』としてのみ」とらえるという点から，「貨幣数量説との関係」をわれわれの主張の中にみいだそうとされる遠藤氏の論理のはこびはすこし荒すぎるように思われる。

いうまでなもくわれわれは，「貨幣の機能」を「流通手段」「としてのみ」，「あるいは価値尺度をはじめその他の機能を認めるが，それらをすべて」「流通手段」「の見地から眺め」ているわけではない。ぎゃくである。「商品流通の本質」をただちに「W—G—W」という「循環」においてのみとりあつかうことは，貨幣の「購買手段」による価値尺度機能を無視して，たんに流通手段としての機能のうちに埋没せしめることになるというのである。遠藤氏の「流通手段（＝購買手段)」という表現からうかがえるように，流通手段と購買手段とを機能的に区別することなく，「G—W」の過程をたんなる「W—G—W」の一構成部分のうちに解消して把握する視点こそ，商品の価格表現機構を前提とした貨幣の独自の運動としての購買手段機能を見失わせるものであり，ひいては流通手段にたいする貨幣としての貨幣の形成の必然性の認識をあいまいにするものなのである。つまり「貨幣数量説」的見解を根本的に批判するためには，「流通手段(＝購買手段)」というごとき貨幣機能の把握こそがまず否定されねばならない。

具体的にいえば，商品流通を形成する購買手段としての貨幣は，一般的等価物としての特殊な商品——生身の金であって現実的価値を有する貨幣でなくてはならないが，流通手段としては部分的には無価値な紙券によってこれを代置することができる，という点にその区別はまずあらわれる。そしてまた本来このような現実的価値を有する貨幣によって形成された商品流通だからこそ，この商品流通を媒介する流通手段にたいして，その量的調節をなす「貨幣としての貨幣」はふたたび生身の金としての貨幣たることが要請される。商品流通は，このように貨幣の運動をとおして形成される過程と，形成された商品流通の内部において，貨幣がたんなる流通手段としてその量的決定を商品流通自身によってあたえられる過程と，さらにこの商品流通がその

外部における貨幣との関連によって媒介されつつ再構成されていく過程とに区別して把握されねばならないというのがわれわれの主張であった。遠藤氏のように「商品流通の本質を商品の変態W—G—Wとして」とらえると，貨幣の機能をかかる「商品の変態」の媒介物としてのみ，あるいは「その他の機能を認める」としてもそれらをすべてかかる媒介物としての「見地から眺め」ることになり，これこそとりもなおさず「貨幣の機能」を「流通手段」としてのみ「眺め」る見地に「あまりにも類似」することになりはしないかというのである。

じっさい「貨幣数量説」的見解は，けっして商品が「それ自身価値〈実体的な〉をもたずに流通にあらわれ」るという把握を根拠として形成されたものではなく，その典型としてのリカードにみられるように，かえって商品はそれ自身「実体的な」「価値」をもって流通にあらわれるものとし，したがって商品流通をたんなる商品流通としてでなく，すでに社会的生産によって媒介された再生産過程の流通断面として把握することにより，貨幣による商品流通媒介の独自の機構は，この商品の価値関係としてあらわれる社会的再生産過程の運動のうちに吸収されてたんなる「流通手段」としての機能においてのみあらわれることになっているのである。(注)

(注)　もちろんあらゆる「貨幣数量説」がこのような論理構造をもっているというのではない。すでにのべたように「貨幣数量説」なるものは，きわめて多くのヴァリエイションにおいてあらわれており，リカードの「貨幣数量説」もその一つにすぎない。しかし商品の価値実体を前提とした商品流通の把握によって数量説的貨幣論をみちびくリカードの論理は，貨幣数量説の古典的なタイプをしめすといってよいであろう。

ここでわれわれは，商品が「それ自身」「実体的な」「価値」をもって「流通にあらわれ」ることを前提として，商品による「貨幣表現」と流通手段としての貨幣の機能とを同一視し，「金貨幣において物的に表現されている」「社会的な面」は，「意識的社会的規制によって，または商品生産社会の意識的機関は国家であるから，国家規制によって，直接的に表現されうる」(5)と

して，一定の限界内においてではあるが，流通する商品の価値によって直接流通手段の価値規定があたえられ，「流通手段は，貨幣標章」したがって金標章になるのではなく「価値標章になる」[(6)]という数量説的見解を，貨幣論に導入したヒルファーディングの所説についてふれておく必要があろう。なぜならヒルファーディングにおいては「交換行為によって，はじめて分業と私有とによって分解された社会の一全体への結合が行われる」関係を，「交換行為における生産共同体の実現」[(7)]としてとらえ，そこから直接，商品の価値関係としての交換関係を「その生産に費された社会的に必要な労働時間の量的関係」によって把握することによって，『資本論』では暗黙のうちに前提とされていた「生産一般」の規定を，「生産共同体」として具体的に商品の価値規定の基礎として措定することになっているからである。このような意味で「実体的な」「価値」をもって「流通」にあらわれる商品にとっては，その価値の「貨幣表現」も，「交換過程において互いに関係しあうこと」も，いずれも「社会に必要な労働時間の生産物に還元され，かかるものとして同等になる」[(8)]ことであって，その間に理論的な区別はあたえられない。したがって，かれの「貨幣の必然性」の論証においては，価値形態論は脱落して「貨幣は交易から自然生的に発生する」[(9)]ものとしてとらえられ，それに対応して「W—G—Wなる関係の内部では，諸商品の価値は常に他の一商品の価値によっておきかえられるから，貨幣表現は瞬過的であるにすぎず，かくて貨幣表現は単に技術的な便宜手段としてあらわれ，この手段の使用は，可能なかぎり避けられるべき空費の因となる。」[(10)]このように「W—G—W」をもって，「諸商品の価値」の「他の一商品の価値によっておきかえられる」過程とし，貨幣の介入を「技術的な便宜手段」とするかぎり，当然流通手段としての貨幣を無価値な紙券によって代置することは，「可能なかぎり避けられるべき空費の因」をとりのぞく合理的な処置としてうけとめられよう。たしかにヒルファーディングもマルクスにしたがって，流通手段の紙幣による代置は「その限界を流通最小限にもつ」[(11)]ことを指摘してはいるが，かれのばあいはしかし，この「流通最小限」については「商品生産社会」の「無政府性が

排除されて」おり，したがって「無政府的生産の作用の排除が，単なる価値標章による金の代置の可能性として現われる[12]」としている点が，マルクスの理解と根本的に異なるのである。

したがって，紙幣流通についてのマルクスの次のような見解――「無価値の徴標が価値表章であるのは，ただそれが流通過程の内部で金を代理するかぎりにおいてであり，しかもそれが金を代理するのは，ただ金そのものが鋳貨として流通過程にはいりこむであろうかぎりにおいて，いいかえれば，商品の交換価値とその変態の速度とがあたえられているとすれば，ただ金自身の価値で規定される量を限度としてのことである[12]」――にたいして，これを「紙幣本位（または自由鋳造禁止本位）の諸法則を最も正しく定式化するもの」と理解しつつ，しかしここで「まず鋳貨量の価値を規定しておいてこれによってはじめて紙幣の価値を規定するというマルクスの通った迂路が，余計に思われる[14]」という批判を下しているヒルファーディングにとっては，「この規定の純粋に社会的な性格は，紙幣の価値を直接に社会的流通価値から導出するばあいの方が，はるかに明瞭に表現される。……紙幣の価値は，金属貨幣を引合いに出すことなしに，導出されえねばならない[15]」のであった。

商品は「それ自身」「実体的な」「価値」をもって流通にあらわれ，したがって「W—G—W」という「流通過程」は，たんに「諸商品の価値」の「他の一商品の価値によるおきかえ」にすぎず，そこでは，たんに購買手段としての貨幣の独自の意義は認められず，遠藤氏のいわゆる「流通手段（＝購買手段）」という貨幣把握のうちに埋没しつつ，「貨幣の価値を直接社会的流通価値から導出する」ことによって，結果的にはマルクスの貨幣論のうちに数量説的見解を導入した，かかるヒルファーディングの理論的構造は，しかしけっして『資本論』の展開とまったく無縁なものとはいえない。それは商品論における価値の実体的把握，価値形態論と矛盾する交換過程論の設定を前提とし「商品流通の本質」を「W—G—W」という「商品の変態」としてとらえる視点にたって，価値形態論の展開やそれを前提とする貨幣の購買手段と

しての独立した把握を，マルクスにおける「迂路」としてしりぞけることによって，もたらされた必然的結果であった。つまり遠藤氏が擁護される『資本論』における「商品流通」把握の一側面を，いわば純粋培養的に理論化したのが，ヒルファーデングの貨幣論だったのである。遠藤氏とヒルファーディングとの差異は，氏にあってはヒルファーディングほど徹底的に自己の理論的前提から導きだされる帰結をおしすすめることなく，中途で立ちどまっておられるがゆえに，その理論的前提の非合理さが赤裸々に露呈しなかったというだけのことである。

(1) 遠藤論文 83頁。　(2) 遠藤論文 82～83頁。
(3) リカード「貨幣銀行論集」小畑茂夫訳，35～36頁。
(4) K・キルマイヤー『数量説』 66頁以下参照。
(5) R・ヒルファーデイング『金融資本論・上』岩波文庫版，38頁。
(6) 同上，74頁。　(7) 同上，17頁。　(8) 同上，29頁。
(9) 同上，33頁。　(10) 同上，37頁。　(11) 同上，40頁。
(12) 同上，39頁。　(13) 『批判』152頁。
(14) ヒルファーディング，前掲書，79頁。　(15) 同上，同頁。

4

さて最後にとりあげねばならないのは，いわゆる貨幣としての貨幣についての遠藤氏の所説である。

「マルクスにあっては，『貨幣』の諸機能がたんに『流通手段量のプールの役割』に『解消』され，その結果貨幣として貨幣の諸機能の『積極的価値関係を形成していく』役割が看過されることになっている」とわれわれの主張を要約しつつ，遠藤氏はこれにたいしてまず次のように反論される。「第一に，『蓄蔵貨幣』『支払手段』『世界貨幣』は，貨幣にあたえられる同じ形態規定ではない。それは貨幣の現存するところの相異なる形態規定である。それが『貨幣』(貨幣としての貨幣)として一括されているのは，いずれも流通手段と区別しての貨幣・交換価値の独立的な定在としての貨幣であるということからなのである。したがって第二に，『蓄蔵貨幣』『支払手段』『世界貨

幣』は，すべて『流通手段のプールの役割』をはたすわけではない。マルクスが流通貨幣量の増減を調節する貯水池の機能をはたすものとしてのべているのは，『蓄蔵貨幣』についてであり，その社会的役割としてなのである。いったい『支払手段』『世界貨幣』がどんな『流通手段量のプールの役割』をはたすというのであろうか。『資本論』をどのような読み方をするとマルクスがそのようなことをのべていることになるのであろうか。」(1)

この第一の指摘の意味は不明確である。「蓄蔵貨幣」「支払手段」「世界貨幣」をもって，「貨幣にあたえられる同じ形態規定」とする見解は，われわれはしらない。われわれも，これらが「貨幣の現存するところの相異なる形態規定」であり，「それが『貨幣』(貨幣としての貨幣) として一括されているのは，いずれも流通手段と区別としての貨幣・交換価値の独立の定在としての貨幣であるということから」であると了解している。だが遠藤氏がこでわざわざこの貨幣としての貨幣についての自明の理解を強調される意図はこ，おそらくそれによって第二の指摘――「『蓄蔵貨幣』『支払手段』世界貨幣』は，すべて『流通手段量のプールの役割』をはたすわけではない」――を理由づけようとされたものであろう。

たしかに，貨幣としての貨幣は，その「相異なる形態規定」にもとづいて「相異なる」機構をとおして流通手段量増減の役割をはたすのであって，けっして一様に「流通手段のプールの役割」をはたすものではない。「流通手段量のプールの役割」というのは，「流通手段の量的変動にたいする調節の機能」というのを簡単に表現したものであるが，これをもって流通手段量の直接的調節の機能とうけとられたとしたら，われわれの記述の不明確さを訂正しなければならない。しかしその含意するところは，「支払手段」にしても「世界貨幣」にしても，「蓄蔵貨幣」の形成とその流通への放出とが直接的に流通手段量の調節をなすのにたいして，それとは異った機能においていわば間接的にではあるが，しかし結局は流通手段の調節の機能をはたすということなのである。たとえば「支払手段」の機能においては，この機能の前提となす商品のかけ売り・かけ買いの関係の形成が，すでに現存流通手

段量の制約を脱して商品流通を拡大するのであって，かかる関係がないばあいは直接流通手段量の増大を必要とするにもかかわらずそれなしにすませるという意味において，いわば間接的な「流通手段の量的変動にたいする調節の機能」としてとらえるべきではないか，というのである。支払手段として貨幣は，もちろんこのようにして形成された社会的関係を一定期間ののちに完結させるものとして出動する。もしこの債権・債務関係が，この支払手段の現実的出動をみることなしに相殺されるとしたら，流通手段も支払手段もなしに，商品流通は拡大したことになるが，このばあいでも支払手段としての貨幣の機能を予定しないでは，かかる関係も形成されえなかったのであって，支払手段の機能に媒介された特殊な商品流通の拡大——流通手段の現存量からはなれた商品流通の拡大——の仕方をしめすものにほかならない。

世界貨幣のばあいは，このような現存流通手段，およびその直接のプールとしての蓄蔵貨幣，支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣，さらにいつでも貨幣に転化できるものとしての奢侈品の材料までもふくめて，すべての現存金（ないし銀）量を原始的に調節するものとして機能することになる。マルクスはこれを「国内的流通部面」にたいする「世界市場」[(2)]という対応でとらえているが，この「国内的流通部面」には，厳密な意味での「商品流通」部面ばかりでなく，それを囲む蓄蔵貨幣や奢侈品としての金（ないし銀）の存在をもふくむのであって，「世界市場」はさらにその外部にあって，これらの金，銀の世界的配分をなす「種々の国民的流通部面の間」であり，したがって金，銀の「産源地」[(4)]をも包括する原始的供給，配分場面をなすことになる。

以上のような把握が，『資本論』における流通手段にたいする貨幣としての貨幣の対応のしたであるとすれば，これを総括して，貨幣としての貨幣はそれぞれ「貨幣の現存するところの相異なる形態規定」であるとしても，その「相異なる形態規定」に応じて，それぞれ「相異なる」「流通手段の量的変動にたいする量的調節の機能」をはたすものとして何故誤っているのであろうか。「『資本論』をどのような読み方をするとマルクスがそのようなこと

をのべ」ていないといえるであろうか。

しかしわれわれの主張の眼目は，貨幣としての貨幣を，このようにそれぞれの「相異なる形態規定」に応じて，「流通手段の量的変動にたいする調節の機能」をはたすものとして把握するとしても，貨幣としての貨幣の理論的意義をたんにかかる「機能」のみに解消してはならないという点にあった。つまり「商品流通」の考察においては，流通手段によって媒介される「諸商品の交換過程」があつかわれるのであるが，それはまだ商品流通の拡大・縮少に応じて流通手段の量が増減することを前提として，この流通手段の量的調節の機能を具体的にあきらかにすることなくとりあつかうという点にしめされているように，いわば「商品流通」のもっとも単純な形態がしめされたにすぎない。「蓄蔵貨幣」「支払手段」をとくことによって，この「商品流通」の単純な形態は，その外部における貨幣の一方的なひきあげおよびそれを前提とした一方的な放出，さらに債権・債務関係の形成による現存流通手段量からはなれた商品流通の拡大というあらたな機構の解明をとおして，展開された形態における「商品流通」へと生成する。そしてかかる流通手段・蓄蔵貨幣・支払手段によって媒介された「商品流通」を，さらに「世界市場」において位置づけられた「商品流通」として，その運動機構を全面的にあきらかにするのが「世界貨幣」範疇の意義なのである。流通手段は蓄蔵貨幣によって直接その量的調節をあたえられるとともに，支払手段機能によってその量的限界をこえた商品流通の拡大が可能とされ，これらは最終的に世界貨幣によって原始的に調節されつつ，商品流通はその完成した運動機構を展開することになる。

このように貨幣としての貨幣範疇の発展に対応して，「商品流通」の構造自体が，いわば抽象的な「商品流通」から具体的な「商品流通」へと発展していくのであるが，このことは「概念としてアプリオリに与えられ」た「貨幣の機能概念」「の必然的な自己産出過程」が「商品流通の論理的形成過程」をみちびくというような「ヘーゲルかぶれの神秘主義」を意味しているわけではない。貨幣としての貨幣は「商品流通」ときりはなされてそれ自身で

「自己展開」をなす概念ではなく，それは「商品流通」の運動の展開自体が必然的に生みだし，かつ「商品流通」の運動のいわば結節点として形成されてくるものである。だがこのようにして形成された貨幣としての貨幣を媒介として，同時に「商品流通」もたんなる流通手段によって媒介された抽象的な「商品流通」にはとどまりえず，その外部の貨幣しての貨幣の運動によってその内部の価値関係を変動せしめられつつ，結局「世界市場」的関連のうちに措定されることによって，はじめてその統一的な価値関係を自己の内に維持する「商品流通」としての運動機構を完成することになるのである。

遠藤氏は，『資本論』では「商品流通の新しい諸関係 —— 諸規定が明らかにされ，新しい規定において貨幣がはたすところの新しい機能が展開されている」として，具体的に「流通W—G—Wがその第一環で中断され，したがってGが流通から引上げられるという関係から『蓄蔵貨幣』が，『商品の譲渡を商品価格の実現から時間的に分離する』という関係から『支払手段』が，そして世界市場という新しい関係から『世界貨幣』が展開されている」[(4)]と説明されている。しかしわれわれが問題としたのは，遠藤氏のいわゆる「流通W—G—Wがその第一環で中断され，したがってGが流通から引上げられるという関係」，「商品の譲渡を商品価格の実現から時間的に分離する関係」および「世界市場という新しい関係」——つまり「商品流通の新しい関係」が，流通手段によって媒介される「商品流通」を前提として，そこからいかなる必然的な根拠をもって展開されてくるかという点にあった。『資本論』では，このような「商品流通の新しい関係」が，現存する具体的な商品流通の諸側面としてつぎつぎに列挙されてはいるが，それらの「新しい関係」のもつ相互の必然的な論理的関連の究明は十分にあたえられていないのではないか。その結果，この「商品流通の新しい関係」に対応する「貨幣がはたすところの新しい機能」も，たんに「交換価値の唯一十全な定在」としての「貨幣商品」「金」のはたす諸機能として，価値尺度，流通手段との対応において並列的に規定されるだけであって，その諸機能の相互においてもつ内的な論理的関連については，立入った考察がなされていないのではないか，と

いうのがわれわれの考察の出発点であった。つまりわれわれは遠藤氏が誤解されたように「貨幣の機能から逆に商品流通の新しい関係が形成される」と主張しているわけではなく，氏とともに「貨幣の機能は……商品交換の種々の契機から導出される」べきだと考えるのであるが，氏と異なるのはさらにこの点を追求して「商品交換の種々の契機」自体について，これをたんに現実の商品流通から摘出して並列するのではなく，それらが流通手段を媒介とする「商品流通」から内的必然性をもって生みだされてくる過程を理論的に解明すべきではないかと主張したのである。

そして問題をこのように把握するならば，貨幣としての貨幣の理論的展開は，たんに「商品流通の新しい諸関係」に対応した「貨幣」のはたすところの新しい機能」の列挙にとどまらず，この貨幣としての貨幣によって媒介された「商品流通の新しい諸関係」の全機構的関連を，流通手段によって媒介された単純な「商品流通」との関係において，すなわち後者から前者への理論的展開のうちに商品流通の構造を把握することにならざるをえないのである。貨幣としての貨幣の理論的問題をこのような関連において把握すること自体，遠藤氏にあっては――そしてその理論的よりどころである久留間鮫造氏の形式的な『資本論』の「解説的研究」(注)によっては――不可能なことであった。というのは，遠藤氏および久留間氏の貨幣と商品流通の理解にあっては，商品の側からする観念的な価値表現を前提とし，貨幣が購買手段として，現実にこの商品の価値を尺度する過程こそが，流通手段によって媒介される商品流通をあきらかにする以前に解明されねばならぬ理論的問題であり，同時にこの過程における貨幣の機能は，流通手段と区別されかつその前提をなす貨幣の第一の基本的機能であるという点が完全に見失われているからである。

(注)　宇野教授も「決して『解説的研究』を『問題外だ』としているわけではない」(宇野弘蔵「マルクスの価値尺度論について」『思想』1964年 9 月号，42頁) といわれるが，われわれも「解説的研究」の重要さについては異論をもたない。ただわれわれは，久留間氏の「解説的研究」は，『資本論』の叙述における混乱ないし不明確な部分について形式的なつじつまをあわせることに終始して，『資本

論』の全体系的関連からその不明確な部分を理論的に整理するという「解説的研究」ではないがゆえに，誤った「解説的研究」にすぎないというのである。その点は，たとえば，さきにみたように久留間氏が，価値形態論，交換過程論，物神性論の関係を，マルクスの「如何にして，何故に，何によつて商品が貨幣であるか」という文言をよりどころとして，この「如何にして」「何故に」「何によつて」が，それぞれ「第一章の第三節と第四節と，第二章とで答えられているものと解」することによって説明されるばあいに集中的にあらわれている。ここではたしかにマルクスの言葉と，貨幣の必然性についての三つの問題領域が結びつけられているが，そもそもこの問題をこのような三つの問題領域に分割して論ずる必然的根拠と，さらにこの問題を何故「如何にして」「何故に」「何によって」という序列によって解明しなくてはならないかという，より根本的な問題についてはまったくふれられていない。もしマルクスが「商品が貨幣である」という問題を，三つの対象領域にわけて論じているとすれば—われわれはむろんそうは考えないが—，かかる方法が採用されねばならぬ理由こそ，「解説的研究」があきらかにすべき課題であろう。ところが久留間氏にあっては，マルクスが「如何にして何故に何によって商品が貨幣であるか」といっているのだから，この問題を「如何にして，何故に，何によつて」という問題領域に分割して論ずべきであると「解説」されるにすぎない。一般に宗教的聖典の「解説」なるものは，そういった程度のものであるかもしれない。しかし『資本論』を科学的体系として研究しようとするわれわれにとっては，かかる「解説」をもって，『資本論』の「解説的研究」とすることはできないのである。

このような理解にあっては，商品流通は，その具体的な形成過程の理論的確定をとびこえて，ただちに「流通W—G—W」として把握されるため，「商品流通の新しい諸契機」も，この「流通W—G—W」にとっての外部的諸事情を列挙することによってしかあたええなくなるのであり，それと同時に「流通 W—G—W」における流通手段としてのGによる G—W の過程と，貨幣としての貨幣が流通の外部から商品流通にはいっていくばあいのG—Wの過程との差異を理解することも不可能となる。

だがこの問題は，遠藤氏がわれわれにたいする批判の第四としてあげられている点に関連するので，具体的に遠藤氏の記述にそってみていこう。

遠藤氏は「第四に，降旗氏は，流通からの貨幣の引上・蓄蔵貨幣の形成〈W—G〉，あるいは蓄蔵貨幣の購買手段としての出動〈G—W〉が，『どち

らもあらたに商品流通それ自身の範囲，価格水準に積極的な影響を与える』ということを，マルクスが看過しているといわれている。はたしてここでいう〈W—G〉や〈G—W〉が商品流通の範囲や価格水準に『積極的に影響を与える』ものであろうか。(5)」と反問されつつ，次のようにわれわれの主張を否定される。「降旗氏は，新しい〈需要〉と〈G—W〉とを同一視されている。しかし新しい〈需要〉は同時に〈G—W〉をともなうにしても，理論的にはそれは厳密に区別する必要がある。いまある商品に新しい〈需要〉が起り，〈G—W〉が行われるということは，たとえそれが同時に起るものだとしても，理論的には——他の事情が不変で，純粋金属流通を前提すれば——新しい〈需要〉——→商品価格の騰貴——→流通手段として必要な貨幣量の増大——→〈G—W〉として把握されねばならないであろう。つまり商品価格の騰貴をもたらす新しい〈需要〉乃至〈需要〉増加そのものは，単純な流通の考察からは規定しえない事情にもとづくものであり〈G—W〉はこの場合には，価格騰貴——→流通必要量の増大の結果としてあらわれるのである。つまり，〈G—W〉そのものが直接流通する商品の範囲を拡大させたり商品の価格を騰貴させたりするのではないのである。(6)」

遠藤氏がここで「新しい〈需要〉」と〈G—W〉とを区別されているのは，「諸商品の価格水準・商品の流通量・貨幣の流通速度は具体的には，『単純な流通の考察の範囲外に属する』諸事情に，単純な流通の『外部にあってただそれに反映するにすぎない諸事情に』よって規定される」という，マルクスのいわゆる「流通貨幣量の法則」に関連してのべられている商品流通の規定を前提として「商品流通」を把握しておられるからである。たしかに流通手段として貨幣の考察においては，したがってこの考察における商品流通のもっとも単純な把握においては，「諸商品の価格水準・商品の流通量・貨幣の流通速度」は「単純な流通の考察の範囲外に属する」諸事情によって規定されていることは当然である。しかし貨幣としての貨幣，およびこれによって媒介される商品流通の考察においてはこれと異なり，「単純な流通の考察の範囲外に属する」諸事情，つまり単純な流通の「外部にあってただそれに

反映すぎない諸事情」が，いかなる機構をとおして商品流通にこの諸事情の変動を「反映」せしめるかという具体的考察が要請されるのである。

貨幣としての貨幣が，市場からの流通手段のひきあげによって形成され，あるいはその市場への流入によって新しく流通手段となるばあいは，この運動によって市場における「諸商品の価格水準・商品の流通量・貨幣の流通速度」自身に変化をあたえる。もちろんこのばあいも，貨幣としての貨幣の運動がそれ自身として「諸商品の価格水準・商品の流通量・貨幣の流通速度」を決定するものではない。それらの決定は，資本主義社会においては根本的には，全資本の再生産過程の変化によってあたえられるのであるが，貨幣としての貨幣の運動は，この社会的総資本の再生産過程によって規定されつつ市場における「諸商品の価格水準・商品の流通量・貨幣の流通速度」を変化せしめるのである。つまり「単純な流通の範囲外に属」し，単純な流通の「外部にあってただそれに反映するにすぎない」資本主義社会の再生産過程は，直接的にはその変動の結果を，まず貨幣としての貨幣の形成ないし消失のうちに結実せしめ，この貨幣としての貨幣の運動を媒介として，商品流通における需給の変動として自己を「反映」せしめるのである。

問題は，単純流通においては，このように社会的再生産過程の変動そのものを直接とりあつかいえないにもかかわらず，この社会的再生産過程の変動の単純流通におよぼす特殊な「反映」の機構そのものは，単純流通自体の構造として解明しなくてはならない点にある。貨幣としての貨幣の範疇は，まさにこのような意味において，単純流通の考察を，資本の運動機構の考察へとむすびつける媒介項をなすのである。貨幣としての貨幣の考察においても，流通手段のばあいと同様，「諸商品の価格水準・商品の流通量・貨幣の流通速度」は「単純な流通の考察の範囲外に属する」として一括して処理してしまえば，流通手段としての貨幣がその機能を阻止され蓄蔵貨幣として化石するばあいも，あるいは市場の外部から貨幣があらたに購買手段としてはいっていくばあいも，この過程によって「諸商品の価格水準・商品の流通量・貨幣の流通速度」が変化せしめられるという問題は，まったく経済学的

考察の範囲外に放逐せしめられることになる。じじつ遠藤氏は「いまある商品に新しい〈需要〉が起り〈G—W〉が行われるということはた，とえそれが同時に起るものだとしても，理論的には……新しい〈需要〉—→商品価格の騰貴—→流通手段として必要な貨幣量の増大—→〈G—W〉として把握されねばならない」といわれる。この「理論的」な立場は，商品流通をたんに流通手段によって媒介された商品流通としてのみとらえ，貨幣として貨幣の運動はその流通手段の変動にたいしてたんに受動的にのみ応ずるプールの役割に解消してとらえる立場を意味する。かかる立場こそ，遠藤氏のいわゆる「貨幣の機能を『流通手段（＝購買手段)』としてのみ，あるいは価値尺度をはじめその他の機能を認めるが，それらはすべて『流通手段（＝購買手段)』の見地から眺め」る「貨幣数量説」の「理論的基礎」といかなる点で異なるというのであろうか。(注) 価値の独立した定在としての貨幣を市場の外部からあらたに商品の購買に投ずる〈G—W〉をもってしても，「流通する商品の範囲を拡大させたり商品の価格を騰貴させたりするのではない」という遠藤氏の結論は，このような流通手段の機能のうちに貨幣機能を埋没せしめる特殊な「理論的」立場にたつことによって，きわめて常識的な商品流通の運動をも認識できなくなった氏の「理論」の欠陥の集中的かつ総括的表現であるといえよう。

（注）　遠藤氏は，われわれがいわゆる「流通貨幣量の法則」を

$$\text{流通手段として機能しつつある貨幣の数量} = \frac{\text{流通する商品の価格総額}}{\text{貨幣の流通回数}}$$

としてしめしたのに対して，『資本論』では，

$$\frac{\text{諸商品の価格総額}}{\text{同名の貨幣片の流通回数}} = \text{流通手段として機能する貨幣の量}$$

となっており，「左辺が右辺つまり流通手段としての貨幣量を決定するのであって，その逆ではないということ」に「注意され」ている。つまりわれわれの叙述では，「『決定するもの』と『決定されるもの』とがこれまたマルクスの公式とは逆になっているのであって，流通手段量によって，商品の価格水準や商品の流通量が決定されることになって」おり，「ここでも貨幣数量説の公式と同じである」（遠藤論文，87頁）というのである。しかしこの等式は，たんにこの等式のみで両辺の規定，被規定関係をしめしえない。マルクスも「流通手段の分量は実現される

べき諸商品の価格総額によって規定されている」(『資』① 241頁）という関係を説明したうえでこの等式をしめしているのである。われわれも，あらかじめかかる関係を説明したうえで，この等式をかかげた。だから「左辺が右辺……を決定するのであって，その逆ではない」というのは，マルクスがすでにそのようなものとして説明をあたえたうえで,この等式をしめしたからであって,同じ説明をあたえたうえでこの左辺と右辺とを逆においても，この等式の意味がかわってくるわけではない。つまりこの両辺のおき方は説明のための技術的な問題にかかわるのである。われわれがあえてこの左辺と右辺とをマルクスの例とは逆にしてしめしたのは，マルクスの規定の内容に異論があるためではなく，ここでは流通手段の量的規定性がテーマとなっているため，これを左辺におく方が叙述形式として自然であろうと考えたからにすぎない。しかし通常の理解能力をもった読者がこの等式の前におかれた説明を読んでも，なおこの等式は「流通手段量によって，商品の価格水準や商品の流通量が決定されることになっている」というふうに理解されるとすれば，遠藤氏の批判にそって，この両辺を逆にした方がよかったであろう。だが流通手段量は流通する商品価格総額によって規定されるという説明のあとに，上の等式をしめしたばあいにも，なおかつ遠藤氏のような読み方をされる特異な理解能力をわれわれは予想することができなかったのである。

(1) 遠藤論文，84～85頁。
(2) 『資』① 277頁。
(3) 『資』① 281頁。
(4) 遠藤論文，86頁。
(5) 遠藤論文，86～87頁。
(6) 遠藤論文，87～88頁。